3 アコモデーション

設備や艤装は、そのフネの性格を決定する大切な要素です。しっかりとしたアコモデーションは、ある意味で、その背景にあるフネ文化の象徴かもしれません。

3-a さまざまなアコモデーション

アコモデーション（accommodations）は、もともと部屋の（宿泊）設備などのことですが、フネの場合は、やや広義の解釈で、そのフネに備わるさまざまな設備関係や艤装などを総称する言葉として使われています。

アコモデーションについては、圧倒的に欧米艇の方がしっかりとしたものとなっています。

決定的なのは、プレジャーボートを楽しむための背景が、文化的にも、社会的にも、確立されていることでしょう。それは、100 年以上の歴史を持つプレジャーボートの歴史の中で培われたものであり、簡単に追いつけるものでありません。

＊

フネの各部の寸法は、そのフネに乗る人の寸法に合わせて作るのが基本です。欧米のフネのほうが天井高を高くしてあるのは、基本的な体格の違いから考えれば当然のことといえるでしょう。

しかし、そういった理由をつけて考えてみても、ほとんどの国産艇のヘッドコンパートメントの天井高は低すぎます。一般住宅で天井高が 1.3m ほどの空間をトイレットにすることなどないはずですが、フネの世界ではそれがあります。

もちろん、欧米のフネでも天井高の低いヘッドコンパートメントはありますが、それはほとんどの場合、そのフネの他の部分でもそれだけしか天井高がない場合です。

これは、フネに限らず、トイレットというものに対する欧米と日本の考え方の違いというべきかもしれません。

北米やヨーロッパのモデルには、ホールディングタンクで汚水を貯めるシステムが普及しています。ただ、問題はその排出で、コストの問題からか、標準仕様だとマリーナなどのバキューム装置を前提とするものが多数派です。これは、通常オプションとして用意される、切り替え弁付きの船外排出システムを選択しておくべきでしょう。

＊

船上で食事を楽しむというのは、これからフネを購入しようという方の想像する「楽しいボートライフ」のひとつのカタチでしょう。

小さなフネでも、テーブルと腰掛けさえあれば、ピクニック風の軽食は十分に楽しめます。しかし、温かい、出来立ての食物を供することができれば、もっと食事の時間を楽しむことができるでしょう。そのためには、最低限、ギャレーに加熱装置が備わっている必要があるわけです。というか、本来、ギャレーとよばれるべき場所の最低条件のひとつが、この「温かい食物を供することができること」だったりするのです。

現代では、電磁調理器や電子レンジなど、火を用いずに温かい食物をつくることのできる調理器具が増えており、そういったものをギャレーに装備するフネもかなりあります。ただ、この種の調理器具には電気が必要で、発電機を持たないフネでは、陸電システムから供給される電力が存在する場所でしか、その種の調理ができません。

電気以外の加熱調理用具にはアルコールやガスがあり、ごく小型のモデルではカセットボンベ式の小型卓上コンロなどが備わるものもあります。

＊

小型のフィッシングボートに関しては、フィッシングに対する考え方の違いが表れています。ひと言でいうと、ロッドやリールはもちろん、その釣果を保存するクーラーボックスをはじめとしたあらゆるタックルが「個人装備」であることを前提にする日本式と、フネに備え付けられるものは極力フネに備え付けてしまおうという欧米（特に米国）式というところでしょうか。

もちろん、それには釣法の違いというのも無関係ではないはずですが、米国でもけっこうボトムフィッシングは盛んで、多くの人が考えるよりも、アチラのフネがそういった使い方に向いていたりすることは確かです。

＊

ほとんどの国産艇に装備されていて、アチラのフネではまず装備されていないものが、船底貫通型のイケスです。

日本のフネのイケスは、フネの床下、あるいはデッキ下の一部を隔壁によって水密区画とし、その部分の船底に穴を開けて外部の水を引き入れるという構造ですから、いわば、意図して船内に浸水個所を設けるようなもの。その設計はもちろん、管理やメインテナンスにも慎重な配慮が必要です。

日本では、それを食べるために釣りをするという方が多数派と思います。

釣った魚を持ち帰って食べようという場合には、釣り上げてすぐに素早く血抜きなどを行い、氷温で保存するなどの処理をしたほうが、狭いイケスで長時間放置するより美味しく魚を食べられるといわれており、多くの方はそれをご存知のはずです。しかしそれでも、イケスについての市場の要望は常にあり、ビルダーはその要望を取り入れてフネを建造しています。

＊

アコモデーションに関しては、そのフネの使い手が自分で充実させていくことも可能な部分です。たとえ、もともとのフネのアコモデーションが貧弱でも、ユーザーの創意工夫でカバーできるところは少なくありません。